

住職挨拶

先ず始めに、盛夏の候、お檀家の皆さまにおかれましては如何お過ごしでしょうか。連日のおかしな気候による、身体への影響はございませんでしょうか。最近ではエコといって冷房を控えたりする方も多いようですが、身体に無理の無い程々の加減にして下さい。我慢をしすぎるとかえって具合を悪くしてしまいます。もうすぐ梅雨も明け、あつという間にお盆・お彼岸という時期になってまいりました。

今回はお盆とお彼岸等を迎えるにあたり、記事を掲載させて頂きます。

合掌

真宗寺住職

長崎寿秀

●お盆とは

お盆とは旧暦の七月十五日を中心に行われる先祖供養の儀式で、先祖の霊があゝの世から現世に戻ってきて、家に迎え入れ一緒に過ごし再びあゝの世に帰っていくという日本古来の信仰と仏教が結びついて出来た行事です。

多くの地方で八月十三日の「迎え盆」から十六日の「送り盆」までの四日間をお盆としているのがほとんどですが、地域によっては七月一杯や、旧暦通り七月十五日を中心に行う所もあります。

お盆は彼岸とならんで、我々の慣習に溶け込んだ仏教行事といつていいでしょう。

お盆は正式には「盂蘭盆会」(うらぼんえ)といいますが。お盆の起源となつた物語は次のようなものです。

お釈迦様の弟子達の中に目連尊者という人がいました。彼は遠くのものごとを居ながらにして見聞出来、他人の心を見通す力をもっていました。ある時、目連は亡き母の供養をするため、神通力使つて死後の世界を眺めてみました。すると母は餓鬼道に堕ちて逆さづりにされて苦しんでいました。目連は驚き悲しみ、神通力でご飯を母に届けようとしませんがどうしても届ける事が出来ません。

目連はお釈迦様に助けを求めます。「おまえの母の罪はあまりにも重いので、おまえの力だけではどうしようもない。しかし七月十五日に大勢の僧が過去を反省し懺悔して修行にいそしむ日が迫っている。この日に僧達にたくさんのご馳走をお供えし、母の為に供養を頼むがよい。」と言われた通りにすると、目連の母は救いを受ける事が出来たと云います。

翌年からこの法要が恒例化し、「盂蘭盆会」(うらぼんえ)と呼ばれるようになりました。

盂蘭盆とはサンスクリット語で「逆さづり」を意味する「ウランバナ」の訛りという一説もあります。

浄土真宗では、人間は死んだらあゝの世や天国へ行くなどとは言いません。亡くなった人で阿弥陀様に救われている人は浄土に生まれて大活動するので墓石の下などにはいないのです。

だからといってお盆を無視せよとも言っているわけではありません。真宗門徒にとってのお盆はこの時期に、自らの日々の有り様をかえりみ、ご先祖様方から仏法に遇わせて頂いたご縁に喜び・感謝させて頂き、家族みなでお参りをあらためてさせて頂くという仏事なのです。

## ■彼岸について

彼岸とは春と秋の年二回、春分の日と秋分の日に中日として行われる仏教行事です。この行事は、インドや中国などには無い日本独自の行事であります。その始まりは、奈良時代に政争に巻き込まれ、無念の死をとげた早良親王（仏教を深く信仰していた）を弔うために全国の僧侶が読経した事が始まりとされており、（「日本後紀」に記述）。それがやがて世間に広まり、春分、秋分の日には死者を供養するようになったと考えられています。

仏教では西方浄土と言って、西方を大切にします。「西」は太陽の沈む方角であり、一日の営みが終わり、すべてが安らかに終わる象徴的な方角であり、すべての存在が最期に帰っていく世界を表しています。春分と秋分の日には太陽が真東から昇り、真西に沈む、まさに人間が最期に帰っていく西方浄土を思うことができる最適な日だったのでしょう。

「彼岸」という言葉に対しては“死後の世界”のようなイメージを持たれるかたも多いのではないのでしょうか。しかし「彼岸」という言葉は、本来そういうどこか別世界を指すものではないのです。迷いと苦しみの中で生死する私たちの世界を「此岸」(ここ)と表し、そこから解放された仏教の理想の境地を「彼岸」と表現したのです。

私たちが生きる「此岸」とは、自らの存在ばかりを主張して、自分の思い通りにならないものを排除しようとする世界です。そんな私たちの在り方を映し出すために、阿彌陀の世界（彼岸）の世界は言葉となり、物語がお経として伝承されてきました。

いつでも、どこでも、選ばず、嫌わず、見捨てず、という阿彌陀仏の浄土の世界としての「彼岸」は「此岸」にもがき苦しむ私たちに知らしめる言葉となつてはたつき続けているのです。そして、日頃の自らの在り方（此岸の生き方）に対する問いや、私たちが煩惱を抱えている身でありながら、自らを絶対化している事に気付いてほしいという、深い願い（本願）がかけられています。

## ■真宗寺年間行事のご案内

### 定例聞法会

七月二十五日（木）、八月二十五日（日）、  
十月二十五日（金） 毎月十時半より

※真宗寺の本堂にて講師の先生より毎月二十五日にお檀家の皆様に浄土真宗（親鸞聖人）の教えを分かりやすくご法話して下さる会です。

### 声明会

七月二十一日（日）、  
八月 十八日（日）、九月 十五日（日）、  
十月 二十日（日）

毎月第三日曜日午後二時より

※真宗寺の住職がお檀家の皆様に浄土真宗のお経を分かりやすく説明し、一緒に声を出しながら皆様とふれあう会です。

### 秋彼岸

### 永代経法要

九月 二十三日（月） 十時半より

### 報恩講

十一月 十一日（月） 十時より

### 鐘つき

十二月三十一日（火） 午後十一時四十五分頃より

### お寺で夏のお楽しみ会

八月二十五日（日） 午後五時より



私たち真宗門徒はこれまで、人の死の悲しみを通して儀式を勤め、聞法し、死において見えてくる生の本質を教えられてきました。ですから、真宗において「彼岸」とは「此岸」に生きる私たちに向けられた呼びかけと言えるのではないのでしょうか。お寺にお墓をお持ちの方々は、お彼岸に年中行事としてお墓参りをなされる方が多いと思います。それは亡き人へのお参りだけでなく、仏様（御先祖様）のご縁・促しによって、自らの在り方を見つめなおし、仏法に出会えた事に感謝してお参り頂けたらと思います。

### ■現代に生きる仏教語

#### ●有り難い

「ありがとう」は、一般に感謝の気持ちやお礼の心を表現する日常語です。仏教の三帰依文には、「人身受け難し、今すでに受く、仏法聞き難し、今すでに聞く」とありますが、人間として生を受け、仏教に出遇えることは非常に難しいことであり、有り難いことなのです。文字通り「有り難い」とは、有るのが困難で珍しいという意味になります。この意味から、貴重であり、もったいない、畏れ多いという感謝の言葉になったわけです。

#### ●安心

安心とは、心配がなく心が安らかなことです。仏教では、仏法によって心の安らぎを得て、動ずることのない境地を指しています。禅宗では、「あんしん」と読み、修行によって得られた安定した境地をいいます。浄土真宗では、「あんじん」と読んで、阿弥陀仏の本願を信じ、念仏して浄土に往生できることを確信して、何事にも左右されない心をいいます。

#### ●看病

本来、仏教の修行者のことを看病者といいますが、現在では修行者である僧侶は死んでからの役割と理解されています。しかし、『大言海』には、僧侶の説法・呪法などをして病者を癒すこと」とあり、『梵網経』

には、「看護福田は、第一の福田なり」と記されており、仏教において看護は大変重要な行いであることが分かります。仏教ホスピスに相当するビハーラとは、死の不安や苦しみからの解放の為に病める人を看護し、最後まで援助する全人的な看取りの運動や心、施設を意味しています。長岡にある西病院は、日本で唯一の仏教ビハーラの施設です。

#### ●大袈裟

大げさと言えば、実像より誇大に表現する意味に使われていますが、文字通り、袈裟は僧侶が身に着けている法衣の事になりますから、大きな袈裟という意味になります。お釈迦様の時代には、道端に落ちていた布切れをつなぎ合わせて衣を作り、これを糞掃衣（ふんぞうえ）といい、非常に粗末な衣にすぎませんでした。しかし、仏教が、日本に伝来してから、袈裟は華美に裝飾され、儀式で使われるようになり、僧侶が仰々しく掛けている様子から、大袈裟という意味になりました。我々僧侶に対する戒めです。

#### ●お陰様

「お陰様」は、日常的に使う感謝の心を表現する言葉です。お蔭とは、神仏の助けや加護の事でしたが、人から受ける恩恵や力添えの意味に変化しています。お釈迦さまは、六方（東西南北上下）の礼拝について、東を拝む時は父母に対し、南方は師に対し、西方は妻子に、北方は友人に、上方は沙門（僧侶）に、下方は目下のものの御苦労に感謝し、合掌せよと説明しています。（『シンガラーカへの教え』『六方礼拝経』）仏教は、全ての者は、互いに関係し合い多くの者の力やお陰、恩恵によって生かされていると説きます。自分ひとりの力で生きていく人間は一人もいません。もしいるとすれば、驕慢な権力者に過ぎないでしょう。



## ■二十一組 宗祖七百五十回御遠忌法要を終えて

先日、三条教区21組による浄土真宗の開祖であられます、親鸞聖人の750回御遠忌法要が5月25日に執り行われました。先ずは、50年に一度という大法要に、真宗寺の沢山の御門徒皆さんに、御参詣頂き有難うございました。

この宗祖御遠忌は3つの部門に分かれて事業をしておりました。イベント部門では、「親鸞さん歩」という本を発行し寺町新潟の町興しイベント（お寺巡りスタンプラリー）をし、法要部門では「念仏」をテーマに御遠忌法要をりゅーとぴあ（コンサートホール）にてお勤めを厳修させて頂きました。

そして、講演会部門では講師に養老猛司 師・評論家の宮崎哲弥 師・大谷大学教授の一楽 真先生をお呼びして、「いのち」について記念講演を2013年9月7日（土）に開くこととなっております。

この御遠忌というものはただ、50年に一度のお祭り行事ではありません。

今を生きる私達がこの御遠忌を機に何に出会うのか、もしかしたら出会っていたのに気付かずしていた自分を知る始まりだと私は思っております。

この御遠忌が私達の因となり、念仏が縁となるのです。

ただ、一言に念仏と言ってもそこには、私達の計りしれない重さがあります。

それが「いのち」です。親鸞聖人から教わり、真宗寺の歴代住職と皆さんのご先祖様が今を生きる私達に残して下さった「いのち」そのものの継承が念仏なのです。

その時代に頻繁に使われた言葉であっても、現在では死語として使われない言葉は沢山あります。時代が流れ、科学・情報収集能力も優れた現代において、過去の歴史が紐解かれ、解明され、私達が疑いもなく信じて学んだ教科書の内容でさえ覆され、変わってきております。

その中で、唯一不変の事実・真実が「念仏」ではないでしょうか。750年たった今でも「念仏」は変わらず私達の命に刻まれております。

因とは種を蒔くこと（出会う）、縁とは育つに必要な栄養分（太陽・水等）「念仏」で、果とは花が咲き・実がなる（信心を得て成仏する）この繰り返しは植物だけでなく、私達を含めた生きとし生けるもの全て一緒（森羅万象）なのです。

私達の先祖が、念仏を通して私達という種を蒔いたのです。そして私達は御遠忌というものに出会いました。

親鸞聖人は750回忌法要をする事を私達に臨んだのではなく、750年経った今でも、念仏の中に私達の命があるという真実を伝えたかったのではないのでしょうか。

今年もお盆・お彼岸とせまってみました。是非この機会に「いのち」に感謝して「南無阿弥陀仏」という「お念仏を」称えてみては如何でしょうか。

きっと、仏様（御先祖様）もお慶びになられる事と思います。

